

---

# アルジェのイタリア女

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アルジエのイタリア女

### 【Nコード】

N4139F

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

御后様にあれこれと意地悪をする領主ムスタファ。ここに奴隷にさらわれてきたイタリア女が登場。美人だが気の強い彼女の正体はロツシーニの喜劇を小説にしました。面白いお話です。こちらにも掲載してもらっています。

<http://www.painwest.net/>

## 第一幕その一

### 第一幕 イタリア女登場

「御妃様御妃様」

ここはアルジェの太守ムスタファの宮殿の中の一室。丸い屋根の建物の中の豪華な部屋の中でアラビア風のみらびやかな服を着た若く品のある女性が周りの者達に声をかけられていた。

見れば侍女や髭のない男達ばかりである。アラビア人もいれば黒人もいる。白人までいる。それがアフリカにあつてオスマン・トルコの統治下にあるこの街らしいと言えはこの街らしい。今は十七世紀、オスマン・トルコは爛熟していた。その中でアルジェもまた繁栄を極めていたのである。

それは御妃と呼ばれるこの女性にも見られた。黒い琥珀の目を持ち黒く長い髪は絹の様である。白い顔は艶やかに化粧されそれが高い鼻と低い目、そしてはつきりとした目を際立たせ彼女を絶世の美女としていた。だがその美女が物憂げに沈んでいたのであった。

「そんなに気を落とされずに」  
男達が言う。誰も髭のないところを見るとどうやら宦官のようである。

「また旦那様の気紛れですから」

「それももう何度目かしら」

窓を背にしてふう、と溜息をつく。窓からは青い空と宮殿の様々な建物が見える。

「あの人っいたら浮気ばかりで。もううんざり」

「まあまあ」

「そんなことは仰らずに」

侍女達も彼女を宥める。だがそれでも気は晴れてはいなかった。

「ねえズルマ」

彼女は侍女の中の一人に声をかけた。

「はい、エルヴィーラ様」

茶色い髪に青い目の若い女がそれに応えた。そして前に進み出た。彼女はエルヴィーラ、すなわちこの貴婦人の最も信頼する侍女なのである。

「あの人のことは知ってるつもりよ」

「はい」

「嫉妬深くて女好きで。男って皆ああなのかしら」

「残念ながらそうでございます」

ズルマの返答は身も蓋もないものであった。

「そして女はそれに耐えるしかありません」

「何て酷いこと」

エルヴィーラはそれを聞いて嘆く顔になった。

「奥さんは四人持ってもよく」

「ええ」

コーランに書いてある通りである。

「離婚すると三回言えばそれで離婚が可能です」

「勝手ね、本当に」

なおその際は一生面倒を見なければならぬが何故かズルマはそれを言わなかった。だが意地悪ではないようである。

「世の中は男の為にあるのです」

「ちよつとズルマ」

「そんなこと言ったら」

同僚の侍女達も宦官達も慌てて彼女を止めようとする。しかしズルマは彼女達に対して悪戯っぽくウィンクを返すのであった。

「!?!」

「一体!?!」

侍女達はそれを見て首を傾げる。だがズルマは私に任せて、といった顔を見せるだけでそれに応えはしなかった。

「まあ御安心下さい」

「安心していいの?」

「左様です。アツラーは御妃様を御護り下さいます」

「だといいけれど」

「何、旦那様の気紛れはいつものこと。それに」

さらに言つと。

「それに？」

「いつも奥様は御妃様だけ。それを覚えておいて下さい」

「よくわからないけれど」

実はエルヴィーラの夫であるムスタファは妻はこのエルヴィーラだけなのである。四人まで持てるしそれだけの余裕もあるというのに。女好きで知られる彼にしては妙なことだとよく言われている。

「宜しいですね」

「え、ええ」

何が何なのかよくわからないままズルマに応えた。

「貴女がそう言うのなら」

「そういうことです。最後は御妃様の幸せになりますから」

「わかつたわ、じゃあ」

エルヴィーラはまだ悲しかったが笑顔を作った。

「笑っておくわ」

「はい」

「御妃様」

そこに別の侍女がやって来た。

「何かしら」

「旦那様が来られましたよ」

「えっ、あの人が」

「笑って笑って」

ズルマが耳元にやって来てエルヴィーラに囁く。

「私が側にいますから。御安心を」

「ええ」

何とか気を保って夫を迎える。するとターバンに絹の贅沢な服とマントを羽織った大きな腹の巨大な男がやって来た。威張り腐った

顔をしていて口髭は八の字で顎鬚も油で固めている。どうにも尊大そのものの趣きの男であった。後ろに何人もの従者を従えていた。「ようこそおいで下さいました」

エルヴィーラは彼に対して恭しく一礼した。この大男こそが彼女の夫ムスタファなのである。

「うむ」

ムスタファはまずは尊大に応えた。

「今日は何用で」

「何用かではないわ」

ムスタファはムツとした顔でエルヴィーラに対して言った。

「昨日のことじゃ」

「昨日の?」

「そうじゃ。共に風呂に入ろうとしたのに」

エルヴィーラを見据えて言う。

「そなただけ侍女達と共に入りおって。おかげでわしは一人寂しく風呂に入ったのじゃぞ」

「それは」

「言い訳は聞かぬ」

彼は子供じみた声で言った。

「いつもそうじゃ。御前はわしを避けておる」

「そのようなことは」

「だから言い訳はいいと言っておるじゃろ」  
段々感情的になつてきていた。

「今度という今度は許せぬ。汝を離婚する」  
「えっ」

「汝を離婚する。次で最後じゃぞ」

「旦那様、それは」

「大丈夫ですよ、御妃様」

真つ青になるエルヴィーラにズルマがまた耳元で囁いてきた。

「次は絶対に仰られませんか」

「けれど」

「ふん」

エルヴィーラは心配したがズルマの言葉通りになった。ムスタフ  
アは言葉を止めた。

## 第一幕その二

「まあよい。最後の言葉は次の機会じゃ」

エルヴィーラはそれを聞いてほっと胸を撫で下ろす。顔色が戻ってきていた。

「じゃがな」

「はい」

「何かあれば、わかるな」

「勿論でございます」

「ならばよい。ハーリー」

「はい」

傍らに控える一人の男がそれに応えた。顔中髭だらけで荒れた服装の如何にもといった感じであつたがその顔付きは意外と穏やかであつた。

「この前捕らえていたイタリアの者がおつたな」

「リンドーロですか」

「何かあればすぐにあれにくれてやれ。よいな」

「あのムスタフア様」

ハーリーはそれを聞いて小さい声で言う。

「あの男、ムスリムではありませんが」

イスラムで結婚出来るのは同じイスラム教徒だけである。

「知っておるぞ」

「ならどうして」

「だったら話は簡単じゃ。あやつをイスラム教徒にせよ」

「はあ」

滅茶苦茶な返答が平然と帰ってきた。

「よいな、あ奴はあれで見所がある」

「そうなのですか」

「そうじゃ、キリスト教徒であつてもな。それにわしは寛大じゃ」

その大きな腹を震わせて言う。

「とりあえず呼んで参れ」

側に控えていた従者の一人に言う。

「よいな」

「わかりました。では」

その従者はすぐに動いた。そしてそのリンドーロを呼びにやった。陽気そうな顔立ちを暗く沈ませた男が緑と水の庭にいた。アフリカの植物を熱い太陽、そして水のせせらぎの音を聴きながらそこにたたずんでいた。

「運がない」

彼はまずこう言った。見ればこの宮殿の奴隷の服を着ている。意外とみすばらしいものではない。実はイスラム社会では奴隷はわりかし権利が認められていた。それにイスラム教徒になれば許してもらえるのだ。そこが実に寛容であった。実はイスラムはキリスト教社会より寛容だったのだ。ムスタファにしる奴隷は自分の大切な財産である。だからそれなりに大事に扱っているのである。

「イタリアを出て海の旅に出たら海賊に捕まって。そして奴隷となりこの地に来て三ヶ月」

イスラム教徒の海賊達の目的は略奪と奴隷の確保であった。これでかなり儲けていたのである。

「イザベツラは元気であるだろうか。あの美しい笑顔は今悲しみに沈んでいるだろうか」

それを思うと気が気でない。イタリアが恋しい。

「遠く離れて暮らすわびしさ。心は痛みに耐え難い。けれど何時か待ち焦がれた日が来る」

それでも希望は忘れない。

「それまでは絶対に耐える、何があっても。イザベツラの愛を信じて耐えてみせる、何があっても」

「あつ、こちらでしたか」

「ん!？」

そこにムスタファに命じられた従者がやって来た。

「リンドーロさん」

「何ですか？」

そしてリンドーロに声をかける。彼はそれに返す。

「御主人様が御呼びですよ」

「御主人様が」

「はい、すぐに来て下さい」

「わかりました。では」

彼はそれを受けてムスタファのところに行って来た。そして頭を垂れる。

「御呼び頂き有り難うございます」

「うむ、リンドーロよ」

彼は仕事を済ませた従者に褒美を与えながら彼に伝えていた。

「そなたを呼んだのは他でもない」

「はい」

「そなた、まだ妻がおらんかったな」

「左様ですが」

「それでじゃ」

ここでちらりとエルヴィーラの方を見た。

「妻が欲しくはないか？」

「結婚ですか」

「うむ、その際はそなたは奴隷ではなくなる」

口髭をこれでもかという程反らせながら言った。

「解放して頂けるのですか」

「悪い話ではないだろう」

「は、はい」

幾ら扱いが良くても奴隷は奴隷だ。それから解放されることが嬉しくない筈がない。

「是非とも」

「で、好みはどうじゃ？」

「好みですか」

「うむ」

ムスタファアはまたエルヴィーラを見た。何処か好きな女の子に意地悪をする男の子の様な目である。

「美女か。お金持ちか？」

「私の好みは」

「優しい女か？可憐な女か？もっとも全てを兼ね備えている女は」  
またエルヴィーラを横目で見た。

「わしも一人しか知らぬがな」

「私もそれは同じです」

「ほう」

ムスタファアはそれを聞いて面白そうに声をあげた。

「知っておるのじゃな」

「そうです、真面目で親切で」

「うむ」

「二つの瞳は明るく」

「よきかな、よきかな」

「髪は黒く」

「よいのう」

それを聞いてさらに機嫌をよくさせる。

「頬は赤く」

「さらによい」

ムスタファアはリンドーロの話の聞いて何故かエルヴィーラのことを考える。またしても妻の方を見るのだ。

「可愛らしい顔立ちで」

「ううむ」

だがそれには納得いかないようである。

「彫刻の様に美しいのではなくか？」

「それが私の理想の女性であります」

リンドーロは頭を垂れて答えた。

「左様か」

「はい」

「まあよい。恋はよいものじゃ」

ムスタファは語る。

「美女に金、何よりも生涯の伴侶を得る幸福、いいものじゃぞ」

「全くです」

「では楽しみにしておれ」

「わかりました」

「すぐにそなたは幸福になるからな」

そこまで言つて彼はその場を下がった。そして廊下を進む。その途中ハーリーが彼に声をかけてきた。

「あの、まさか」

「確かにあ奴は奴隷から解放してやる」

「では」

「しかしな」

ムスタファは言う。

「わしの考えはわかつておろう」

「それでは」

「わしの妻は一人だけじゃ」

強い言葉であつた。

「よいな」

「わかりました。けど」

「何じゃ？」

「奥方は」

「言葉は二回までは取り消せるのじゃ」

ムスタファはしれつとした様子であつた。

「わかつたな」

「はあ」

結局彼も彼で素直ではないのだ。だがその臍曲がりか。とんだ惨事を起こすことになるのだ。

### 第一幕その三

アルジェの港。活気溢れるこの港で今海賊達が積荷を卸していた。  
「キリスト教徒から獲って来たのはどれだ？」

そこにはハーリーも来ていた。彼は今回の略奪には参加していなかったが頭目としてこの場を仕切っているのである。周りいは荒くれ者達が集まっていた。

「そっちにありますよ」

船の上から一人が下を指差す。そこにはかなりの積荷があった。

「おお、随分あるな」

「へい、大漁でした」

「そうだな。金もあって」

「奴隷もありますよ」

「よし、上出来だ」

ハーリーはそれを聞いて会心の笑みを浮かべた。

「何処までもいいな」

「その中でも上玉が一人」

「ほう」

ハーリーはそれを聞いてさらに機嫌をよくする。

「またそれはいいな」

「ムスタファ様も大喜びですね」

「さてな、いや」

ここでリンドーロに嫁を探してやるといった話を思い出した。

「別にいいか」

「どうかしたんですかい？」

「いや、こっちの都合だ」

「そうですか」

そんなやり取りをしながら歩いている。その中には小柄で黒い髪に大きな黒く丸い目、少しふっくらとした頬を持つ若い女がいた。

擦れ違つたら振り返るような、そうした美しさと印象を持つ女であった。赤いスカートに緑の上着を着ている。靴は白であった。

「ついてないわね」

彼女はふう、と溜息を吐き出して言った。

「海賊に捕まつてこんなところに連れて来られて」

「危害を加えられないだけかもしれませんが、お嬢さん」

海賊の一人が彼女にこう言ってきた。

「俺達海賊なんだぜ、わかつてんのか」

「わかつてるわよ」

女も負けないと言り返す。

「悲しい運命、そして儂い恋ね」

「キリスト教徒共よりずっと優しいと思うけどな、俺達」

「そうだよな」

海賊達は女の後ろで言い合う。実際にキリスト教徒の海賊よりもイスラム教徒の海賊の方が穏やかであったりする。それに殺し方も彼等はコーランにのっとり。キリスト教徒のように惨たらしく殺すわけではないのだ。

「どれもこれも全部成り行き任せ。恐ろしさも怖さも悲しみも全部忘れてしまいたいわ」

「だから危害は加えてないのに」

「俺達つてそんなにおっかないかな」

海賊達の言葉は彼女の耳には入らない。彼女は今他のことをかんがえていたのである。

「リンドーロはどうしているかしら。イタリアで別れてそのまま。

探しに来たら私が捕まつて」

ふう、とまた溜息をついた。

「神様の御加護があらんことを。そうすればきつと希望が」

「なあ娘さん」

海賊達がまた声をかけてきた。

「イザベツラよ」

彼女は海賊達に自分の名を言った。

「前にも言つたじゃない」

「じゃあイザベツラさんよ」

「何かしら」

「とりあえずあんた奴隷になるから」

「奴隷」

「つってもあんた達とこみたいに酷いことはしないさ」

そこは保障してみせる。

「俺達は奴隷でもそれなりに扱いはいいからよ」

「そうそう」

ことさらにキリスト教徒達とは違うと言う。だがこれは実際にそうであった。オスマン・トルコは寛容な国であり奴隷であつてもかなりの地位に就けたりした。無論ムスリムになれば奴隷から解放される。キリスト教よりも遥かに寛大であつたのだ。

「そんなに気を落とさんな」

「今だつて何の危害も加えられていないしさ」

「なあ」

「それで奴隷になつてどうなるの？」

イザベツラはあらためて彼等に問うた。

「流し目やにこやかな笑みでも誰かにあげればいいの？」

「まあそういうこつた」

海賊達は言った。

「そのあんたはまあ召使かな」

「お慈悲を」

「タツデオさん」

ふつくらとした姿のイタリア風の服を着た中年の男が連れられてきた。何処かひょうきんな顔をしている。少なくとも悪人の顔ではなかった。

「同じ奴隷でな」

「結局奴隷なんですか」

「それが嫌ならムスリムになるんだな」

海賊達はイザベツラにタツデオと呼ばれたそのふくよかな男に言った。

「そうすればあなたは奴隷から解放される」

「いい話だろ」

「けど私は」

イタリアのヴェネツィアの人間だと語るうとした。実はイザベツラも同じヴェネツィアの人間である。

「イタリアのどっかの国なんて俺達には関係ないな」

「そんな」

そう言われて小さくなってしまった。イザベツラが何とか強がっているのと正反対であった。

「俺達にとつちやあの長靴にある国はあまり違いがないのさ」

「トルコの前の小国のどれかってとこだな」

「あのヴェネツィアが小国なんて」

「だってそうじゃないか」

海賊達は言い返す。

「あんたの国なんて俺達の国に比べれば」

「ちつぽけなもんさ。ここの方がずっと大きくはないかい？」

「別にそうは思わないわ」

イザベツラは彼等の自慢に平然と返した。

「海はやっぱりヴェネツィアよ」

「おやおや」

「気の強いお嬢さんで」

「おい御前達」

そこへハーリーがやって来た。

「そこにいたのか。早く積荷をおろせ」

「あつ、ハーリーさん」

「こりゃどうも」

「全く。仕事が溜まっているんだからな」

ハーリーは口を苦くしながら海賊達に対して言った。

「積荷も奴隷達も……んっ!？」

ここでタツデオに気付いた。

「御前は奴隷か？」

「はあ」

タツデオはハーリーに力ない声で応えた。

「お慈悲を」

「だからこうしてここまで連れて来てやってるんだ、感謝しろって  
「けれど奴隷には」

また海賊達に対して情けない言葉で応えた。

「全く、男の癖にだらしない」

「イタリアの男ってのは喧嘩は本当に弱いからな」

「女の子には強いのにな」

「全くだぜ」

「とほほ」

「ちよつとタツデオさん」

あまりにも自国の男がけちよんけちよんに言われるのでイザベッ

ラはたまりかねてタツデオに声をかけてきた。

「ちよつとは言いなさいよ」

「けどさ」

だが彼にはどうも言い返せない。奴隷にされて落ち込んでいるの  
である。

「もう、情けないんだから」

「随分の気の強い娘さんだな」

ハーリーがそんなやり取りからイザベッラに気付いた。

「ええ、それで手を焼きましたよ」

「船の中でもこんなので」

「大変だったんだな」

「まあ」

「しかし」

彼はここでイザベツラの顔を見た。

「美人だな、えらく」

「有り難う」

イザベツラはその言葉に気をよくして気取ったポーズをとる。

「これはいい。ムスタファ様に献上しよう」

「ムスタファ様って？」

「この領主様だ。知らないのか」

「ええ、残念だけど」

タツデオとは全く違いしれつとした顔で返す。

「イタリアならともかくね」

「気が強いな。まあいい」

「嫌だつて言えば？」

「ここからイタリアまで泳いで帰ってもらつ」

ハーリーも負けじと言い返す。

## 第一幕その四

「運がよくて体力があればそのまま泳ぎ着けるな」

「そんなことができたならそもそも捕まっていけないとは思わないの？」

「まあそうかもしれんが。それは嫌だろう」

「つまり断ることは許さないってわけね」

「そういうことだ。聞き分けはよくな」

「やれやれといったところね」

「冗談めかして言ってみせる。」

「トルコ人もきついわね」

「あんた達よりはましだと思いがね」

「仕方ないわね。じゃあ行ってあげるわ」

「連れて行ってやるう。これでいいか」

「ええいいわ」

結局ムスタファのところ連れて行かれることになった。ハリー

はもう一人連れて行くうと思つた。

「御前がいいな」

「やっぱり私なんですな」

タツデオはハリーの声をかけられて泣きそうな顔になった。

「丁度いいじゃない」

「だがイザベツラはこう言つた。」

「他人だと思つて」

「他人じゃないでしょ、だって姪なのに」

「えっ!？」

「おお、それは都合がいい」

ハリーにとってはそれはそれで都合のいいことであつたのだ。

「親戚同士だと。側にいたら寂しくないだろう」

「ちよつとイザベツラ」

タツデオはこっそりとイザベツラに囁いた。

「何でまたいきなり」

「そうした方がいいでしょ」

イザベツラもそれに応えて囁いた。

「他人同士よりは」

「そう言われればそうかな」

何となくだが頷いた。

「そういうことよ。まあ任せて」

イザベツラはにこりと笑って言った。

「イタリア女は。安くはないのよ」

「それじゃあ頼むよ」

「そつちも合せてよね」

「ああわかったよ、それじゃあ」

「ええ」

「じゃあ行くか」

ハーリーが二人に声をかけてきた。

「もうですか」

「ここにいっても仕方がないだろう？」

もう積荷はあらかた卸してしまっていた。そして奴隷達の中には要領がいいことにもうイスラムに改宗しようとしている者達までいた。

「いいか、こう言うんだ」

その時に何と言うべきか海賊の一人が教えていた。

「夢の中に白馬に乗った王子様が現われ」

「王子様が現われ」

「汝は今キリスト教徒だがムスリムになる為に生まれたのだと言われたのだとな」

「それでいいんですか!？」

奴隷達はあまりにも嘘らしいその話に首を傾げさせていた。

「そんなので」

「ああ、一向に構わん」

だが海賊は自信満々であった。

「俺もそう言つてイスラム教徒になつたからな」

「そうだったんですか」

「俺だつて最初はキリスト教徒だったんだよ」

「何と」

衝撃の事実であつた。

「だが捕まつてな。それで奴隷になるのが嫌で改宗したんだ」

「何とまあ」

「だからわかるんだ」

つまり実経験から語つているのである。

「それだけでいいんだ」

「それでイスラム教徒に」

「その通りだ、イスラムはいいぞ」

満面に笑みを讃えながら言う。

「皆平等でアッラーが与えて下さるものもいい。奥さんは四人まで  
持てる」

「四人まで」

「もつとも公平に愛さないといけないけれどな。それでも四人も持  
てる」

「それはいい」

「しかもレディーファーストだ」

「本当ですか!？」

女達がそれを聞いて驚きの声をあげる。

「キリスト教よりずっとな。アッラーは女性も護つて下さる」

「それは素晴らしい」

「けれどお酒は」

「豚肉も」

「どうしてもそれ等を口にしたいか？」

それを問うとであつた。

「はい」

「やっぱり酒と肉は」

「アッラーよ赦し給え」

彼は突然そんなことを言い出した。

「何ですか、それ」

「酒を飲む前にこう言えばいいんだ」

「それでいいんですか」

「そうだ、アッラーは心優しき神、赦して下さい」

こう述べた。

「それなら何の迷いもない」

「一日五回の礼拝もそれだけいいのがあれば」

「是非イスラムに」

「アッラーよ」

こうして上手い具合にイスラム教徒に仕立てあげていった。実際にイスラムは他の宗教も認めているが同時にムスリムになった場合の特典も見せて勧誘していたりする。しかもそこには嘘偽りはなかった。王侯も乞食も同じイスラムなのだ。しかもムハンマドの考えの影響でイスラムは女性の権利に関してはこの時代極めて進んでいた。ムハンマドはフェミニストだったのだ。酒も豚肉もある程度大目に見られた。そうした宗教であるから爆発的に広まり大きな勢力となったのである。ただ単に大きくなったのではないのだ。

「何かあつち騒がしいね」

「フン、私にとっては関係ないことだわ」

イザベツラは改宗する者達に背を向けてこう言った。

「じゃあ行きましょう」

「行くしかないんだね」

「そうよ、行かなきゃどうにもならないのよ」

そしてまた言った。

「何事もね」

「わかったよ、それじゃあ」

「ええ」

二人はハーリーについてその場を後にした。荷馬車に入れられて宮殿に向かう。とりあえず港を後にするのであった。

## 第一幕その五

宮殿の中。エルヴィーラが悲しい顔をして自室にいた。絹のカーテンを握って窓の外を見ていた。

「御妃様」

そんな彼女にまたズルマが声をかけてきた。

「そんなに悲しまれては」

「そんなこと言われても」

エルヴィーラの顔は晴れはしなかった。憂いに満ちた顔をズルマに向けてきた。

「悲しまずにいられないわ」

「悲しい顔をされるから悲しいのですよ」

「笑えっというの？」

「はい」

ズルマは答えた。

「どんな時でも笑わないと」

「出来ないわ、今は」

それでもエルヴィーラは今とてもそんな心境にはなれなかった。

「とても」

「やはり御心配なのですわ」

「心配じゃないって言えば嘘になるわ」

「やっぱり」

「このまま。あの人は私を」

「それはないですよ」

「そうかしら」

そんな言葉は気休めにしか思えなかった。

「私はそうは思えないけれど」

「だって旦那様は」

「おい」

「あつ」

「あの人ね」

ムスタファアの声であった。彼はやたらとにこにこした顔で部屋に入って来たのであった。相変わらずハーリーや従者達を連れている。

「よい話があつたぞ」

「何でしょうか」

「先程奴隷が届いたのだがな」

「はい」

エルヴィーラは夫と正対していた。そして話を聞く。

「その中にとびきりの美女がいたらしいのだ」

「えっ」

エルヴィーラはそれを聞いて顔を真っ青にさせた。ムスタファアはそんな妻の顔を見て内心ほくそ笑んでいた。

(うむ、驚いているな)

それを見ただけで何か楽しくなってくる。子供めいた楽しみだ。

(それでは)

「ハーリー」

「はい」

あらためてハーリーに声をかけた。

「してその奴隷は」

「こちらでございます。さあ」

「はい」

従者の一人がそれに応えて一旦退いた。そしてアラビア風の服に着替えみらびやかに着飾ったイザベツラを連れて来たのであった。

「如何でございますよう」

「そうじゃな」

ムスタファアはまずはエルヴィーラの方をチラリと見た。そのうえで述べた。

「よいではないか」

「有り難うございます」

(あら)

エルヴィーラはムスタファのその視線に気付かなかったがズルマは気付いた。

(旦那様ったら)

そしてこっそりとハーリーの方に来て囁いた。

「ねえハーリーさん」

「何だい？」

ハーリーはそれを受けて彼女に耳を貸す。

「もしかしてまた？」

「わかるだろ」

ハーリーは何も飾らずにそう返した。

「いつものあれさ」

「やっぱり」

「いつものことじゃないか」

「けれど御后様は凄く心配してらっしゃるわ」

そう言ってエルヴィーラに顔を向けた。ハーリーもそれに続く。

見れば今にも崩れ落ちそうな顔をしていた。

「確かに」

「どうするつもりなの？」

「どうするつもりだって言われてもな」

ハーリーはムスタファが夢中でエルヴィーラに意地悪をし、エルヴィーラがそれに塞ぎ込んでいる端でズルマと話を続けていた。

「旦那様のあれは殆ど日常だし」

「困ったわね」

実は二人もムスタファのこの子供っばさに困っていたのである。

「ではエルヴィーラよ」

「はい」

「そなたはどうするつもりなのじゃ？」

「どうするつもりとは」

「わしは妻は一人じゃ」

ムスタファアはまたしても意地悪そうな笑みを浮かべてエルヴィーラに言った。

「一人。それは知っておるな」

「はい」

それに力なく頷いた。

「ではここで妻を迎えたとする」

「私は」

「わしが後一回じゃな。あれを言えば」

「それで」

「イタリア男の嫁になる。どうじゃ」

「それは……」

顔が真っ青になって何も言えなくなる。その困った様子を見るのがムスタファアの趣味なのである。

「旦那様もね」

そんなムスタファアを見てズルマは言った。

「あれさえなければね」

「そうだよな、凄くいい人なのに」

「ハーリーもそれは同意であつた。」

「ささ、あのイタリア男を呼んでまいれ」

二人をよそにムスタファアは従者達に言う。

「エルヴィーラに会わせる為にな」

「あれで御妃様がいないと凄く困るのに」

「この前メツカに行かれた時は凄かつたんだつて？」

「そうよ、もうずっと塞ぎ込んで」

ズルマはその時のことを言いはじめた。

「何もできなくなって。それで御后様が帰って来られたら大喜び」

「難儀だな。何で素直になれないんだか」

「そういう人だからね」

「それでじゃ」

ムスタファアはイザベッラに声をかけていた。チラリとエルヴィー

ラを見ながら。

(あら)

その目の動きにイザベツラも気付いた。

(この旦那様あの奥方に御執心ね)

いい加減誰にでもわかるものであった。わかっているのは当人とエルヴィーラだけである。エルヴィーラにしる深窓の令嬢なのかどうにも鈍かった。

「して娘よ」

「イザベツラでございます」

イザベツラはムスタファに一礼して名乗った。

「うむ、ではイザベツラよ」

「はい」

「ここに呼ばれたのは何故だと思うか」

「さて」

まずはとぼけてみせた。

「旦那様の御加護でしょうか」

「確かにわしは慈悲深い」

「自分で言わなければね」

「完璧なのにな」

ズルマとハーリーが後ろで突っ込みを入れる。

## 第一幕その六

「コーランにのっとな」

「はい」

「そしてじゃ」

またエルヴィーラを見た。悲しさのあまり俯いていた。

(うむむ、良いぞ)

エルヴィーラの悲しむ様子を見て満足を感じていた。

「何で御后様もわからないのかね」

「ハーリーにとってもこれは不思議であった。」

「いい加減誰にもわかるものなのに」

「御后様もあれで純情なのよ」

「純情!？」

「そうよ」

ズルマは答えた。

「それが何か？」

「いや、あれはな」

鈍感じゃないのかと言おうと思ったがそれは止めた。ズルマはエルヴィーラ一筋の忠誠心溢れる使用人なのである。下手なことを言えばどやされるのはこっちであった。

「まあいいさ」

「そうなの」

「今回も落ち着くところで落ち着くかな」

「落ち着かせるわ」

ズルマは強い声で言った。

「私かね」

「じゃあ期待させてもらおうよ」

「協力してね」

「あから」

ハーリーはその言葉にずっこけた。見れば今度はタツデオがムスタファに声をかけていた。

「あの、旦那様」

おずおずとムスタファに言う。イザベツラと共に釣れて来られてきたのだ。

「何だ、御主は」

「私の叔父です」

イザベツラは港で創作した設定をムスタファにも述べた。

「叔父か」

「はい」

イザベツラは頷いた。

「旅行中に囚われました」

「左様であったか」

「そしてここまで」

「ううむ」

「御慈悲を」

「だから別に悪さをせねば何もせぬ」

ムスタファはうざそうな顔でタツデオに言った。

「安心してよいぞ」

「はあ」

それを聞いてもまだ安心してはいなかった。オドオドした様子は相変わらずであった。

「それにしても」

ムスタファはそんなタツデオとイザベツラを見比べて言った。

「本当に血が繋がっておるのか？姿も似ておらんし」

「そうですよ」

イザベツラは平気な顔をしてそう述べた。

「信じて頂けませんか？」

「どうにもな」

彼は答えた。

「似ても似つかん」

「けれど本当なのですよ」

似ても似つかわないという言葉には正直に返した。

「ふむ」

「旦那様」

そこへリンドーロを呼びにやっていた。従者が戻ってきた。

「リンドーロを連れてきました」

「うむ」

それに頷き部屋の中へ入れる。彼を見てイザベツラは思わず声をあげそうになった。

「えっ」

（何と）

タツデオも。イザベツラは何とか口には出さなかったがタツデオは違っていた。

「お、おい」

だがここでイザベツラはタツデオの足を思い切り踏んだ。  
「痛っ」

「どうしたのじゃ？」

「あら、御免あそばせ」

イザベツラは平然とムスタファに応える。

「叔父様、足を踏んでしまいましたわ」

「何じゃ、気をつけるがいい」

「申し訳ありません」

それに謝りながらタツデオに声をかける。

「今は静かにしていてね」

「ああ、済まない」

足を押さえてヒイヒイ言いながらそれに応える。タツデオにとつては迂闊なことであったが災難でもあった。

「まさか」

リンドーロの方も気付いていた。

「イザベツラが」

「リンドーロが」

二人は顔を見合わせている。ムスタファはエルヴィーラを見て得意になつており、エルヴィーラは嘆いて俯いているのでそれには気付かない。だがズルマとハーリーは違つていた。

「あら、あの二人」

最初に気付いたのはズルマであつた。

「面白そうね」

「面白そうとは？」

「ほら、見てよ」

そう言つてイザベツラとリンドーロを指差す。

「何か変な様子よ」

「確かに」

ハーリーもそれに気付いた。

「知り合いかな」

「リンドーロさんつてイタリア出身だつたわね」

「ああ、ヴェネツィアさ」

ハーリーは答えた。

「で、あの二人も」

「ふうん、じゃあ若しかして恋人同士だつたのかも」

「まさか」

「世界つてのは狭いわよ」

否定しようとするハーリーにあえてこう言つた。

「それこそ目と鼻の先にあるようなもの」

「同じヴェネツィアだしな」

「そういうことよ」

「まさかこんなところで」

「何て運命の悪戯」

リンドーロとイザベツラはお互いを見詰め合つていた。

「遠く離れた異郷の地でまた巡り会えるなんて」

「これこそ神様のお導きなのね」

「ううむ、運がいいと言うべきか」

タツデオはそれを見て一人呟いていた。

「けれど奴隷じゃな。どうしたものか」

「ふふふ、困っておるな」

ムスタファはムスタファで自分の奥方を見ている。

「さてさて、困った顔も美しい」

「これで私もお終いなのね」

エルヴィーラは一番自分の世界に入ってしまった。他の誰の様子も目に入りはしない。

## 第一幕その七

「アッラーよ、お救い下さい」  
「さてと」

ムスタファアはここで意地悪の最後の仕上げに入った。

「これリンドーロよ」  
「は、はい」

リンドーロはその言葉に慌ててムスタファアに応える。顔をイザベツラから離れた。

「ここに呼んだのは他でもない」  
「どのような御用件でしょうか」  
「実はな、そなたを幸せにしてやるうと思ってな」  
「私をですか」  
「そうじゃ。どうじゃ？」  
「はあ」

「何じゃ。嫌なのか？」

リンドーロの顔が晴れないのにすぐに気が付いた。

「いえ、そうではないですが」  
「ふむ。だといいがな」

そうは言いながらも内心それでほっとしていた。彼もエルヴィーラと別れるつもりはないからだ。

「では何が欲しいのじゃ？」  
「何と言われましても」  
「これとっては無いのだ。」

「今のところは」  
「ふむ、そちは無欲じゃな」  
「旦那様」

そしてすぐにイザベツラが話に入って来た。

「今度はそなたか」

「私には欲しいものがあるのですが」

彼女は一礼してから述べた。

「宜しいでしょうか」

「うむ、申してみよ」

彼は鷹揚な仕草でそれに頷いた。

「何でもよいぞ」

「ではこちらの従者を一人私に」

「従者をか」

「今日の前にいるこのイタリアの若者を」

「あら、考えたわね」

ズルマはそれを聞いてニヤリと笑った。

「彼を囲おうってのね」

「そうなのか」

ハリーはそれを聞いて二人をまた見た。

「ええそうよ。やっぱり恋人同士ね」

「成程、それでとりあえずは手許に置いて」

「そこからまた何かするわよ。面白くなってきたわ」

「何か嬉しそうだね」

そんなズルマのうきつきとした顔を見て言った。

「どうしたんだい？」

「だって御妃様にとってはいいい展開だから」

「そういえばそうか。けれどものみち旦那様は本当は別れる気はないぜ」

「それでもよ。御妃様に意地悪するのはやっぱり」

ズルマはここでは顔を顰めさせた。

「許せないわよ」

「相変わらず御妃様一筋ってわけか」

「そういうこと。御妃様の為なら火の中水の中よ」

それがズルマの心得であった。その心のまま話の流れを見守っていたのである。

「旦那様」

イザベツラはここで切り札を出してきた。思い切りの微笑をムスタファに見せてきたのだ。

「それでは」

「うむ」

ムスタファは頷く。その後ろにはズルマとハーリーがいる。

「さて、これで舞台は一つ進んだわ」

「吉と出るか凶と出るか」

「出すんじゃないわ」

ズルマはハーリーにそう返した。

「するのよ。わかったかしら」

「了解。それじゃあ」

「御礼は後で弾むからね」

「別にいさ、それは」

だがハーリーはにこりと笑ってこう言うのだった。

「あら、どうして？」

「こっちもこっちであの素直でない旦那様の為に動いてるからな」

「そういうことね」

「ああ、じゃあな」

意気揚々とリンドーロと共にその場を後にするイザベツラ。そしてその後にはタツデオがついてくる。ムスタファは相変わらず鷹揚な態度は変わらずズルマとハーリーはそれを後ろで見守っている。悲しんでいるのはエルヴィーラだけ。けれど彼女の周りには人が大勢いた。

## 第二幕その一

### 第二幕 イタリア女の機知

イザベツラが宮殿に来たことは一つの騒ぎであった。宮殿の中はもうその話でもちきりだった。

「離婚されるという話は本当かな」

「旦那様がか？」

「ああ、それでリンドー口を御后様にな」

「まさか」

だがそれはすぐに否定された。

「知ってるだろ？」

そして皆こそこそと話をはじめた。

「旦那様のことは」

「そうだがな」

誰もがそれはわかっていた。わかっているのはエルヴィーラだけだ。

「しかしな、あのイタリア女」

「どうしたんだ？」

「凄い美人じゃないか」

「確かに」

「可愛らしい外見だな」

それは皆認めていた。

「旦那様も今回こそは」

「さて、それはどうかかな」

「違うっていいのか？」

「当たり前だろ、旦那様は何といってもだな」

「それはそうだけだな」

もう言うまでもないことであった。

「だから大丈夫だって」

「そうかな」

「そうだよ、安心しなつて」

「うっん」

「どうかな」

「やっぱりまずいんじゃないのか？」

「またえらく心配性だな、おい」

「だつてよ」

そんなヒソヒソ話が宮殿の中で続けられる。それはズルマとハーリーの耳にも入っていた。

「上手くいつてるわね」

二人はこの時ズルマの部屋にいた。召使であるがエルヴィーラの信任が篤い為こうして部屋も与えられているのである。二人は南方の果物を食べながら話をしていた。

「いい流れよ」

「そうなのか」

ズルマは窓の方にいた。そしてハーリーはテーブルに座つてその上に置かれているオレンジを食べていた。ズルマはナツメヤシである。

「見事なまでに」

「わしにはそうは思えないけれどな」

だがハーリーはそうは思っていないかつた。

「この流れはどうも」

「心配なの？」

「このまま旦那様がその気になつたら」

「だからそれはないわよ」

ハーリーにそう返した。

「絶対にね」

「絶対にか」

「アッラーに誓つわ」

ズルマはそこまで言った。

「それは有り得ないから」

「だといいがな」

「だって私がいるし」

ここでニヤリと笑った。

「そうそう簡単には御后様を不幸にはさせないわ」

「御妃様も幸せだね」

ハーリーは不敵に笑うズルマを見て言った。

「そこまで言える召使がいて」

「いい方だからね」

ズルマは言う。

「だから私も何とかしてあげたいのよ」

「そうなのか」

「そうよ」

二人はそんな話をしていった。その時イザベツラとリンドーロは宮殿の端で二人話をしていた。

「まさかこんなところにいるなんて思わなかったわ」

イザベツラはリンドーロを見て言った。

「正直驚いたわ」

「僕だってそうだよ」

リンドーロも言う。

「異郷で君と出会うなんて」

「これこそ神の御導きね」

「そうだね。けれど」

リンドーロの顔は晴れはしなかった。

「これからどうすればいいかな」

「これから？」

「だってさ、ここはアルジェだ」

彼は言う。

「僕達は奴隷なんだよ」

「そうね」

「そうねって」

平然とした様子のイザベツラに不安を覚えた。

「奴隷だから」

「かといってムスリムになるわけにもいかないでしょ」

「それはね」

こくりと頷いた。

「問題外だ。そうしたらそれこそ僕達は無理矢理違う相手と結婚だ」

「まあ実際にはないでしょうけど」

イザベツラもムスタファのことには気付いていたのだ。

「けれど早くイタリアに帰らないと」

「うん」

「こんなところにいたら結婚なんて夢のまた夢」

「折角お互いの両親を説き伏せたのに」

「さもないと全てが水の泡よ」

彼等にも悩みの種はあったのだ。どうやってここを抜け出して結婚するかだ。

「まあ焦ることはないわ」

イザベツラは言った。

「丁度貴方と私は今は一緒にいられるし」

「うん」

「落ち着いて考えましょう、どうするべきかね」

「わかったよ。じゃあ」

「ええ、またね」

二人は別れた。そしてそれぞれの言いつけられている仕事に戻る。宮殿の庭ではムスタファがまたしても鷹揚な動作で従者達に囲まれていた。

「そのイタリア人」

「は、はい」

おどおどとしているタツデオに声をかけた。

「そなた、中々トルコのこと詳しいな」

「まあ商人でしたので」

彼はおどおどしながらそれに答えた。

「それで」

「左様か」

「はい」

そして頷いた。

「よし、ではわかった」

「わかったとは」

「そなたを侍従長に命じる」

「えっ!？」

思いも寄らぬ取立てである。それを言い渡されたタツデオは目が点になった。

「今何と」

「だから侍従長にするというのじゃ。丁度前のがムスリムになって空席だったしな」

「ですが侍従長などとは」

「まずそなたはアラビア語が堪能じゃ」

「はあ」

「そしてイタリア人だ。これだけで充分じゃ」

「それで侍従長に」

「わしは別にキリスト教徒でもイタリア人でもよいのじゃ」  
ムスタファはにこにここと笑いながら述べた。

「剣を向けない限りはな」

「そうなのですか」

「そなたは別に剣も持ってはおらぬ、それでじゃ」

彼は言う。

「侍従長に命じる。わしの通訳もやれ」

「しかし旦那様はイタリア語が話せるではありませんか」  
「確かにな」

しかしムスタファはここで難しい顔をした。

「だがこれはヴェネツィアの言葉じゃろっ？」

「ええ、まあ」

「他の方言は知らぬのじゃ。この前ジェノヴァの者が来てもわからんかったのじゃ」

「そうなのですか」

「そうした者とのやり取りを助けてくれ」

「畏まりました」

とりあえずそれに頷いた。

## 第二幕その二

「では及ばずながら」

「頼むぞ、侍従長」

「はい」

(今度はランタン持ちとは)

タツデオは心の中で誇り高きキリスト教徒、自由を愛するイタリア人がムスリムに仕えるのを悲しんでいた。なおランタン持ちとは取り持ち役のことを言う。

「では旦那様」

「うむ」

「宜しく願います」

「こちらこそな。では皆の者」

「はい」

他の者達はムスタファに応える。

「これからはこのタツデオ侍従長の言うことをよく聞くようにな」

「わかりました」

「侍従長、これから宜しく願います」

「ええ、こちらこそ」

侍従達の丁寧な挨拶と素朴な様子にはいい印象を受けた。だがやはり今の境遇を悲しむ気持ちは消えはしなかった。消せる筈もなかった。

「では私はまずは」

「何処か行くのか？」

「姪にこのことを伝えに行きます。宜しいでしょうか」

「いや、いいぞ」

ムスタファはにこりと笑って言った。

「喜びは伝えるがいい。いいな」

「わかりました。では」

タツデオは応えた。そして一礼してその場を後にするのであった。大広間。今イザベツラはトルコの豪華な服を着てそこに佇んでいた。リンドーロと別れてここでこれからのことを考えていたのだ。そこにズルマがやって来た。

「貴女は」

イザベツラの方がまず彼女に気付いた。

「宜しく、ズルマっていうのよ」

「ズルマさんね」

「イザベツラさんだったわよね」

「ええ」

まずは挨拶が交あわされた。

「宜しくね」

「こちらこそ」

「それでね」

ズルマが話を切り出した。

「何かしら」

「御姫様のことだけねどね」

「ええ」

「旦那様に捨てられるのじゃないかって凄く悲しんでいるの。それはわかるでしょ」

「けれど大丈夫よ」

イザベツラはそれを聞いたうえで言った。

「あの旦那様はね」

「わかってるみたいね」

ズルマはそれを聞いてニヤリと笑った。

「若しかしてと思ったけれど」

「誰だつてわかるわよ」

イザベツラはズルマに対してこう返した。

「あれだけあからさまだとね」

「そうね。誰だつてね」

ズルマは我が意を得たりといった感じで笑っていた。見ればイザベツラも笑っている。

「けれどね、御妃様は違うのよ」

「そうみたいね」

「あの方は純真な方だから。そう言われると凄く心配されるの」

「そして旦那様はそうして困っているのを見て喜ぶ」

「そういうこと。悪趣味でしょ」

「子供みたいね」

そうとしか思えなかった。

「あれさえなければあの旦那様も凄くいい人なのだけれど」

「で、どうするの?」

イザベツラは問う。

「あの旦那様引っ込めたいのでしょ?」

「それはそうだけれどね」

ズルマは考えを巡らせていた。

「今のところこれといって」

「ないのね」

「どうしたものかしら」

彼女は言った。

「これから」

「そうね」

何時の間にか二人は手を組んでいた。そして互いに考え合う。

「とりあえずあの旦那様本当は私なんかどうでもいいのよ」

「ええ」

「あくまで御后様だけ、そこがまず肝心ね」

「そうよね、それをまず念頭に置いて」

「ギャフンと言わせたいけど」

「ギャフンというよりゲフンて感じだけれど」

ムスタファへの悪口であった。

「まあね。あの体格だから。ともかくね」

「もう二度とこんな子供じみたことはさせない」  
「それが問題なのよ」  
「そうよね、どうすべきか」  
二人は考える。だがそこへタツデオがやって来た。  
「ああ、そこにいたか」  
「叔父様」  
「あれ、貴女は」  
タツデオはズルマに気付いた。  
「確か御妃様の」  
「ズルマよ、宜しくね」  
「ああこちらこそ。ところでな」  
ふと話を変えてきた。  
「ええ」  
「わしは今度侍従長になったのじゃ」  
「侍従長に」  
「それを伝えに来たのじゃが」  
「そうだったの」  
「またえらい出世ね」  
これにはズルマも驚いていた。  
「いきなり侍従長だなんて」  
「何でもたまたま空席でわしがアラビア語もイタリア語も話せるからな」  
「へえ」  
「あつ、タツデオさん」  
そこへ侍従の一人が来た。  
「こちらへ旦那様が来られますよ」  
「こちらにですか」  
「はい、ここは侍従長としてお出迎え下さい」  
「わかりました。では」  
「頑張ってくださいね、叔父様」

「うむ、では」

一応畏まって態度をあらためる。そしてムスタファを迎えるのであった。

「ようこそこちらへ」

「大した用事ではないのじゃがな」

ムスタファはこう断った上で述べる。

「実はな」

「はい」

「イザベツラに伝えることがあったのじゃ」

「私にですか」

「左様、この度そなたの叔父が侍従長になったのじゃがな」

「それはもう叔父様から直接聞きましたか」

「まあわしから直接言おうと思つてな」

彼は言う。

### 第二幕その三

「そなたにはもう専属の従者がいるし」

「リンドーロさんですね」

「あれはよい若者じゃ」

ムスタファにこやかに笑って述べる。

「中々な」

「はい」

「で、わしはな。そなたにもう一つ幸せを与えたいのじゃ。リンドーロに対して」

「それは一体」

「そなた等、改宗する気はないか？」

「改宗ですか」

「左様、イスラムにな」

にこりと笑って言う。ここでズルマがイザベツラにそっと近寄って囁いてきた。

「わかつてると思うけれど」

「ええ」

イザベツラはそれに頷く。

「駄目よ、旦那様がまた頭に乗るから」

「わかつてるわ。どうせ私と結婚するぞって御后様に嫌がらせするつもりでしょうね」

「まあずっとここに居るつもりならムスリムになる方がいいけれど」

「悪いけどイタリアに帰らせてもらおうわ」

「じゃあここはかわすのね」

「勿論」

そんなやり取りの後で二人は別れた。そしてイザベツラはまたムスタファと向かい合った。

「ムスリムにですか」

「そうじゃ」

ムスタファは鷹揚に頷いた。

「どうじゃ、悪い考えではあるまい。おい」

従者の一人に声をかける。

「リンドー口をこちらに」

「わかりました」

従者の一人が頷きリンドー口を呼びにやる。イザベッラはそれを見届けた後でまたムスタファに言った。

「その前に旦那様」

「何じゃ？」

「私はある噂を耳に挟んだのですが」

「噂とな」

「はい、近頃御后様が毎日嘆き悲しまれているとか」

「ふむ、そういえばな」

彼はあえてふと気付いた態度で述べた。

「そんな話もあるな」

「それで私からの提案なのですが」

「うむ」

「ここは御后様を慰められては如何でしょうか」

「じゃがな」

それは上手いことを言っただけで逃げるつもりであった。生憎それをするつもりはない。それは何故か。彼の楽しみであるからだ。自分で楽しみを消す者はいない。

「それには及ばぬ」

「何故ですか？」

「何故と言われてもな」

二人が話をしている間にズルマはこっそりと部屋を後にする。この時ズルマはイザベッラとそっと目で合図をした。

「今はな」

「思い立ったが吉日ですよ」

「さて」

とぼけようとする。

「どうしたものか」

「アツラーも御覧になられています」

「それもわかつているが」

だがそれでもするつもりはない。

「タイミングがな」

「タイミングですか」

「左様、何事にも時と場合があつてだな」

彼は言う。

「それへの見極めが大事なのじゃ」

「それでしたら」

「ムッ!？」

舞台は急に移った。

「今こそその時ですわ」

「旦那様」

ズルマが部屋に戻ってきた。

（よし）

イザベツラはその声を聞いて会心の笑みを心の中で浮かべた。

（丁度いいわ）

（上手い具合ね）

ズルマも。二人は顔を見合せて笑っていた。

「どうしたのじゃ？」

「御后様が来られました」

「呼んだ覚えはないぞ」

「この部屋に忘れ物らしくて。それでこちらに」

「そうだったのか」

「これこそアツラーの思し召しですわね」

イザベツラはにこりと笑ってムスタファに言った。

「さあ御后様」

「はい」

「確かに」

それはエルヴィーラの声であった。ムスタファは彼女が来たことを確信せざるを得なかった。

丁度そこへリンドーロもやって来た。部屋の中の只ならぬ様子に彼もすぐに気付いた。

「あの」

そしてタツデオに囁いた。

「どうしたんですか、一体」

「実はイザベツラがな」

彼は説明する。

「何か妙なことを言い出してな」

「妙なことを」

「そうじゃ。旦那様に御妃様に対して親切にされるようにと」

「そんなことを言っても」

リンドーロにもムスタファの本心はわかっていた。

「旦那様はどう見ても」

「それでもな」

タツデオはリンドーロに囁く。

「それをあえて言っているようなのじゃ」

「どうして」

「さてな、何か考えがあるのは確かじゃな」

彼は言う。

「とりあえずはそれを見極めないとな。よいな」

「はい」

リンドーロは頷いた。そしてまずはイザベツラの動きを見守ることにした。

部屋の中にはムスタファとイザベツラがいる。その周りに他の者達がいる。リンドーロとタツデオ、エルヴィーラとズルマもまた。彼等はイザベツラが何を言うのかじっと見守っていたのであった。

「では旦那様」

まずはイザベツラが口を開いた。

「ここは寛容に」

「何をせよというのだ？」

「ですから御后様を慰められては」

「悪くはないな」

まずは頷いてみせた。

「しかしだ」

「しかし？」

「今はまだだ」

「何故ですか？」

「気が乗らぬのだ。ではまたな」

「何処へ」

「一人で休みたいだけじゃ。来る必要はないぞ」

そう言つて一人部屋を後にした。そしてその場には一回が残つた。

「御后様」

その中でズルマはそつとエルヴィーラに添つてきた。静かに囁きかける。

「御心配なく」

「御心配なくつて言われても」

「もうすぐですからね。御気が晴れるのは」

「だといいいけれど」

「まあそんなふうに御気を落とされずに。宜しいですね」

「貴女がそう言うのなら」

ここはズルマを信じることにした。まだ憂いのある顔であるが頷くことにした。イザベツラはそれを見ながら自分はリンドーロとタツデオのところに来て来た。

「私に考えがあるのだけれど」

「それは一体」

「いい？」

そして二人に囁く。話は次の幕に移ろうとしていた。

## 第二幕その四

そんなやり取りはある程度はハーリーの耳にも入っていた。彼は宮殿の中の一室でそのことを思っていた。

「さて、旦那様は気付いておられるな」

まずはそれをよしとした。

「あのイタリア女とズルマの策略に。よいことだ」  
だがここで彼は呟いた。

「しかしな」

顎鬚をしごきながら言う。

「イタリアの女というものは闊達で頭がよく回るな。他の国の女よりも、勿論トルコの女よりも手強いな。それはよく覚えておくしよう、今後の為に」

そう言うつと部屋を後にした。するとそこに入れ替わりにリンドーロとタツデオがやって来た。

「上手くいきますかね」

「いくんじやないか？」

タツデオはとりあえずはリンドーロの言葉に頷いた。背が高くスラリとしたリンドーロに対してタツデオは小柄で太っている。それが何処かアラビア数字の一〇を思わせるものになっていた。

「イザベツラがああ言っていると」と

「イザベツラは頭がいいですから」

「そうじゃな。どうもそれで君は徳をして」  
タツデオはリンドーロを見上げて言う。

「わしは損ばかりをしている」

「ははは」

「全く、貧乏くじばかりじゃ」

「ではここにいる花達に顔を向けられては？」

「冗談ポイよ」

それは最初から考えになかった。

「わしが好きなのはイタリアの女じゃ。他の国の女はいらん」

「貴方もですか」

「イタリアの女こそがこの世で最もいいのじゃ」

ここでまで言う。

「他の国の女なぞ。イタリア女の前にはどれだけの価値があるものか」

「全くです」

「そのイタリアに帰る為にも」

「ここはイザベツラの策の通りに」

「あの旦那様をはめるとしようか。よいな」

「はい、合言葉は」

返事はこうであった。

「パツパタチ」

「パツパタチ」

「左様、全てパツパタチの為に」

「やりましょう」

二人はいささか訳のわからないことを言いながら部屋を後にした。そしてそのままムスタファのいる部屋に向かった。見れば彼はベッドの上で横になっていた。その姿はまるで海岸に寝転がる太ったアシカのようであった。

「旦那様」

「何じゃ？」

ムスタファは二人に声をかけられて眠そうな顔を彼等に向けてきた。どうやら本当に少し寝ていたようである。そんな惚けた顔をしていた。

「大した用でないなら控えておれ」

「それが大した用でございます」

「ローマから軍隊でも来たのか？」

もうローマ帝国なぞないから冗談であるのがわかる。

「いえ、違います。実はですね」

「戦争ではないのだな」

「はい。お誘いに参りました」

「わしにか」

「はい」

二人はわざと恭しく応えた。

「左様でございます」

「実はですね」

「うむ」

「今ヴェネツィアで流行っている歌と音楽の華やかな生活を送る会」

「その名もパツパタチ」

「パツパタチ!？」

ムスタファはそのパツパタチを聞いて少し反応を示した。

「聞いたことのない名じやのう」

「左様でございます。何故ならこの会は」

「選ばれた人達がそれぞれ推薦してしか入られないのですから」

「ふうむ」

ムスタファはそれを聞いて顔を少し上げた。

「推薦だけか」

「はい、そしてこの度は」

「私達が旦那様を」

「入るには改宗しろとかは言わぬか？」

「勿論」

「そういうことは関係ありません」

「こう保障してみせた。」

「そうか」

「そつでございます」

「よし、わかった」

改宗の必要なしと聞いてムスタファはその巨体をゆっくりと起した。

「それなら問題ない、話を聞くか」

「はい」

(やりましたね)

(うむ、いい流れじゃ)

二人は目配せをして頷き合った。それからまたムスタファアに話した。

「勿論女性にも」

「もてるとでもいうのか？」

「意中の人をその思いのままに」

「何と」

これが彼にとってでは心の琴線に触れることであった。

「それはまことか」

「はい」

二人はにこりと笑って頷いた。

「如何でしょうか」

「それにわしが入るのじゃな」

「左様です」

「どうでしょうか」

「それにわしを誘ってくれと」

「今申し上げた通りでございます」

にこりと笑って述べる。

「どうされますか？旦那様」

「意中の人を思い通りに」

ムスタファアの頭の中にある女性のことが思い浮かぶ。だがそれはイザベツラではない。

「悪くはないな」

「では」

「入られますか？」

「無論じゃ」

ムスタファアは満面に笑みを浮かべて言った。

## 第二幕その五

「是非共」

「それでは」

「これより旦那様もパツパタチの会員です」

「歌に踊りに料理、そして意中の方が旦那様を」

「それだけあれば確かに極楽」

やはり頭の中にはイザベツラは全くいない。思うのは一人だけであつた。

「わしの好みは五月蠅くてな」

「はい」

「流石に並の女では満足できないと」

「違ふのじゃ。女なぞな、どれだけいても問題ではない」

「といたしますと」

「わしは思う人は一人でいいのじゃ」

「やっぱりな」

「何でそれで素直になれないんでしようね」

タツデオとリンドーロはそれを聞いて囁き合う。女と見れば一直線のイタリア人にとってはムスタファのこつしたへそ曲がりはどうにも理解できないものであるのだ。

「パツパタチでそれが適うのならばな」

「勿論適います」

「酒に料理もついて」

「しかも歌も。言うことはなしじゃな」

「それではどうぞ我々の下に」

「いざパツパタチへ」

「うむ、参ろう」

ムスタファは笑顔で二人の誘いを受けた。

「ではいざパツパタチへ」

「酒に料理に歌に」

「そしてただ一人の思い人の下へ・参ろうぞ」

彼等は笑顔で誓い合った。結局ムスタファの頭の中には一人しかいないのであった。それがなければどんな酒に歌に料理も。何の意味もないものであったのであった。

「ではな」

「はい」

ムスタファはとりあえずは部屋を去った。何か用件を思い出したのであるうか。部屋にはリンドーロとタツデオだけになった。二人はまずは策が成功したのを確かめ合った。

「まずはこれでよし」

「はい」

ニンマリとした顔で頷き合う。

「それでイザベツラですが」

「パツパタチの他にも何か策があるのか？」

「策ではなく望みです」

「望みとは」

「私達だけでなくここにいる全てのイタリアの者達を逃がしたいと  
「そうなのか」

「はい、奴隷になっている者は全て」

つまり改宗していない者達である。ムスタファの宮殿には彼等の他にもまだこうして改宗せず奴隷に留まっているイタリア人が結構いるのである。

「彼等もか」

「そうです、そして共に帰ろうと」

「またそれは難しいな」

「彼等はイザベツラが集めるそうですよ」

「じゃがもう改宗して奴隷になっていない者やここがいいという者もいるじゃろう。確かに奴隷じゃああの旦那様はいい人じゃし何よりもここはいいところじゃ」

「まあそうした人は仕方ないでしょうが」

そうした人間に無理強いしても仕方がない。それは諦めるのであった。

「しかしそれでもかなりの数になりますね」

「そうじゃ。正直わし等だけでも逃れるのは難しいが」

「あえてやってみるといふことでしょうか」

「ではここはイザベツラに賭けるか」

「はい」

リンドーロは頷いた。

「それでは」

「うむ」

タツデオも頷いた。ここでそのイザベツラが部屋にやって来た。

「イザベツラ」

「二人共ここにいたのね」

イザベツラはその魅力的な笑みを二人に浮かべて言う。

「私達と一緒にここを去りたいっていう人達はもう集まったわよ」

「もうか」

「ええ、もうね」

「流石だね」

「だって私はイタリア人よ」

イザベツラは胸を張ってこう述べた。

「災難にかえって奮い立ってイタリアへの愛情と義務を忘れない、それがイタリア人じゃない」

「確かにね」

この場合は彼等の故郷ヴェネツィアのことを指す。イタリア人はどちらかというと祖国愛より故郷愛の方が強い人達なのである。

「あらゆる困難に打ち勝って、祖国と義務を忘れずに。勇気と献身を持って」

こういうふうには言葉通りには中々いかないものであるが。少なくともイザベツラは気概は持っていた。

「常に立ち向かわないと。イタリア、そしてヴェネツィアの栄光の為にね」

「その為に皆で」

「そうよ、もう準備はできているわ」

「後はパツパタチで」

「そう、パツパタチで」

三人は顔を見合わせて言い合う。

「あの旦那様を御后様にくつつけて」

「それは楽にできるわね」

「そうだね、けれどその後は」

「それももう心配いらないわ」

イザベツラは二人を安心させるように言う。

「私が全部手配しておいたから」

「じゃあ後は」

「そうよ、話を進めるだけ」

「なら話は早いな」

タツデオがにんまりと笑う。

「ええ、イタリアはもうすぐよ」

「長靴が僕等を待っている」

「さあ、帰ったら美味しい酒にマツケローニじゃ」

この時代のマカロニは今で言うフェットチーネに近い。スパゲティが出来るのはもっと後である。なおこの時代のパスタはナポリ特産でかなりの高級品であった。

## 第二幕その六

「奮発しますね」

「ずつと食べたかったからな」

「じゃあそれはパツパタチの時に」

「ははは、そうじゃな」

「イタリアでのパツパタチで」

「うむ」

三人は笑顔で頷き合つて部屋を後にする。そして最後の大芝居に入るのであつた。

パツパタチの準備は宮殿をあげて進められていた。ムスタファはもう夢を見ているような顔であつた。

「パツパタチでな」

「はい」

ハリーが受け答えを受け持っていた。

「わしは遂に思い人を手に入れるのじゃ」

「左様ですか」

応えながらふと呟く。

「だったら素直にならればいいのに」

「何か言つたか？」

「いえ、何も」

「でじゃ、妃はどうしておる？」

「御后様ですか」

ハリーはそれを聞いてやはりと思つたが勿論これは口には出さない。

「そうじゃ、あれにも来るように言つておるが」

「ズルマと一緒に準備に取り掛かつておられましたよ」

「そうか、それは何より」

それを聞いて満足そうに笑う。

「少しは優しくしておかねばな。わしは寛大な男じゃからな」

「お流石でございます」

「ここでも本心は隠した。」

「では行くとしよう」

「宴の場に」

「そうじゃ。美味しい酒と料理に歌と踊り、そして美女が待つておるぞ」

ムスタファは意気揚々とイザベツラ達が用意するそのパツパタチの宴に向かう。もうそこでは夢の様な御馳走と美酒が用意され美女達がひしめいていた。歌ももうはじまっていた。

「これはムスタファ様」

「これまで異常に着飾ったイザベツラ達がムスタファを出迎える。」

ここで彼等はふとハーリーと目配せをしたがそれはムスタファには気付かれなかった。

「ようこそパツパタチへ」

「うむ、真に楽しそうじゃな」

「楽しいのはこれからです」

タツデオがにこりと笑って述べた。

「これからか」

「はい、宴はまだはじまったばかり」

「ですからまずは入会の儀式を」

リンドーロが言った。

「それはどんなものじゃ？」

「はい、それはまず私の言葉に続いて下さい」

タツデオがすすすと前に出て来て述べた。

「そなたのか」

「はい、宜しいでしょうか」

「うむ」

「ではまずは」

タツデオはわざとにこやかな顔に笑い転げそうになる愉快さを隠

して言いはじめた。ムスタファは彼に顔を向けてそれに続こうとしていた。

「見ても見ぬふり」

「見ても見ぬふり」

ムスタファは復唱する。

「聞いても聞かぬふり」

「聞いても聞かぬふり」

「そして」

「そして」

「食べて楽しみ」

「食べて楽しみ」

言葉を繰り返す。

「喋ることを捨て」

「喋ることを捨て」

「ここに私は宣言するものである」

タツデオは急に格式ばり、姿勢を正して述べた。

「ここに私は宣言するものである」

ムスタファもそれを繰り返す。

「必要ならば何でも誓う」

「必要ならば何でも誓う」

そしてまた復唱に入った。

「余計なことを喋らず」

「余計なことを喋らず」

「掟に従って宣誓する」

「掟に従って宣誓する」

「パツパタチ ムスタファ」

「パツパタチ ムスタファ」

「これでいいです」

にこりと笑って伝える。

「これでわしもパツパタチの一員か」

「そうです、ここでは飲んで楽しむだけです。何も喋ってはなりません」

「今誓った通りじゃな」

「そうです、食べて飲み」

「だがその前にじゃ」

「何か」

「酒を飲むのじゃろう？」

そこを怪訝な顔で問う。

「はい、上等のワインを」

「今から一言だけ。喋るのを許してくれ」

「何でしょうか」

「すぐ済む」

彼はタツデオに言う。

「ならばよいな」

「はい、ではどうぞ」

「済まぬな。では」

ムスタファは喋ることを許されると頭を垂れてこう述べた。

「アッラーよ許し給え」

酒を飲むからである。ムスリムは本来ならば酒を飲んではならない。だが飲む場合にはこうしてアッラーに許しを乞うてから飲むのである。信仰心の深い彼はそれを守ったのである。

「それで宜しいでしょうか」

ムスタファは無言で頷いた。それが証であった。

「では早速」

「このワインを」

「この羊肉を」

「オレンジを」

山の様な美酒と御馳走をムスタファの前に次々と持って来る。タツデオだけでなくイザベツラやリンドーロ、他の奴隷達もどんどん持って来る。そんな御馳走責めにムスタファは戸惑いながらもそれ

を受けた。美酒に美食、歌に踊りに溺れていく。その中で彼はエルヴィーラのことを思っていた。

「むむむ、エルヴィーラ」

酩酊した状態で呟いていた。

「後はそなただけがいればよい」

「御妃様がですか？」

「左様、左様」

イザベツラの問いにも前後不覚になっているので答えているのかどうかさえわからない。だが言ったことは確かである。

「わしはあれさえおればいいのじゃ」

「その言葉、まことですね」

「わしは嘘は言わん」

「こつも言った。」

「ずっとエルヴィーラと一緒にいたいじゃ。他の女なぞ何の興味もない」

「けれどもどうして意地悪をされるのですか？」

今度はリンドーロがムスタファに尋ねた。

「御后様を悲しませて」

「それはあれじゃ」

まだ飲み食いを続けながら応える。

「何となくな、意地悪を試してみたくなるのじゃ」

「何となくって」

「まんま子供じゃないですか」

「子供っぽくてもいいのじゃ」

彼はリンドーロ達に返した。

「あれさえ側にいてくれたらな」

「他には誰もいらないと」

「うむ」

酔ってはいたがその言葉は本心からであった。

## 第二幕その七

「アッラーに誓つてな」

「成程、その御言葉二言はありませんね」

「何度も言つておろう」

イザベツラの言葉にもう彼女が誰だかわからない有様で述べる。

「わしは嘘はつかぬと」

「そういうことですか」

「そういうことじゃ。エルヴィーラがいればそれでよいのじゃ」

そう言つとそのまま大の字に倒れ込んだ。それを確かめてからイザベツラはにこりと笑つて部屋の入り口の方に顔を向けた。そして言つた。

「聞いたかしら」

「ええ、確かにね」

ズルマが出て来た。その後ろにはハーリーもいる。

「聞いたわよ」

「俺もだ」

「御后様もですよ」

「え、ええ」

そこにはエルヴィーラもいた。彼女はまだ信じられないといった様子で酔い潰れている夫を見ていた。

「聞いたけれど」

「これが旦那様の本音なんですよ」

「嘘みたい」

「私にはちゃんとわかつてましたよ」

「私も」

「私もです」

ズルマだけでなくハーリーやイザベツラ達までそう応える。彼等にとつてはこれはわかりきつたことであるので驚くものではなかつ

た。だがエルヴィーラは違っていたのだ。

「そんなに私のことを」

「好きだから意地悪したりもするのですよ」

「うう、エルヴィーラ」

ムスタファは夢の中で彼女の名を呼んでいた。

「もつとわしと共にいよう、ずっと一緒にな」

「あなた……」

「ですからね、御后様」

ズルマが言う。

「御心を悩ませることはないのですよ」

「ええ」

「旦那様は御后様じゃなければ駄目なのですから」

「勿論私のことは全然目に入っておりませんでした」

イザベツラも述べる。

「御后様ばかりで」

「そうだったの」

「単なる意地悪ですよ。おわかりになられたでしょう？」

「そうね」

エルヴィーラの顔が少しづつ晴れてきていた。

「けれど何故こんなことを」

「それは御后様のことしか考えられないからですよ」

「そうなの」

「ええ、ですから御気になさらずに」

「女はいちいちそんなことを気にしてはいけません。笑って済ませないと」

イザベツラまでエルヴィーラにこう述べた。

「ですからね」

「わかったわ。それじゃあ」

エルヴィーラも意を決した。

「これからは。そうさせてもらおうわ」

「はい」  
「是非共」  
「では御后様」  
イザベツラはあらためてエルヴィーラに挨拶をした。  
「私はこれで」  
「何処に行くの?」  
「彼女は国に帰るのですよ」  
ズルマが答える。  
「国に」  
「そう、イタリアへ。皆を連れて」  
「そうなの。本当は駄目だけれど」  
今回のことで借りができた。だからそれはよしとした。  
「いいわ。今度のことは有り難う」  
「いえいえ。ではリンドーロ」  
「うん」  
リンドーロが頷く。  
「タツデオさんも」  
「もう船も用意できていることじゃし」  
「タツデオもそれに頷く。」  
「帰るとするか」  
「イタリアへ」  
「輝かしいヴェネツィアへ」  
「今度は捕まるんじゃないぞ」  
「ハーリーが彼等に言った。」  
「流石に二回も捕まるとは思えないが」  
「勿論よ」  
イザベツラがにこりと笑ってそれに応えた。  
「一度失敗したら二度はしないのがイタリア女」  
「ほう、いいねえ」  
「そして失敗を成功に生かすのよ」

「じゃあ今度会う時は奴隷じゃなくて友達としてだな」

「そうね。一度ヴェネツィアにも寄って」

「言われなくてもな、今度交易で行かせてもらうよ」

この時代はまだ海賊と商人の区別は曖昧なものであった。これは何処でも同じで倭寇もそうであった。彼等も私的に交易をしたり海賊になったりであったのだ。

## 第二幕その八

「楽しみにしてるわ。それじゃあね」

「ああ、またな」

イザベツラ達に連れられてイタリア人達は宮殿を後にしていく。  
ここでようやくムスタファが我に返った。

「ふうう」

まだ酔いが回ってはいいても目は醒めていた。

「食ったのう。飲んだし」

「そうですね」

「おう、そなた達も来ていたのか」

ズルマの声に応えて彼女達に顔を向ける。

「楽しかったぞ、パツパタチは」

「そうみたいです」

ズルマはここでニタリと笑ってきた。そして主に対して言った。

「旦那様の御気持ちも知ることができましたし」

「わしの!？」

「はい、御后様もそれを御聞きになられました」

「何と」

その言葉にはもう何も言うことが出来なかった。

「しまったのう」

観念した。止むを得ずそれを認めることにしたのである。

「聞かれてしまったは」

「それではパツパタチの新しい誓いとして」

「どんな誓いじゃ？」

「素直に一人の女性を愛する」

「素直に一人の女性を愛する」

ズルマの言葉を復唱した。

「決して意地悪をしない」

「決して意地悪をしない」

「宜しいですね」

「宜しいとも」

彼は苦笑いを浮かべたまま最後まで言った。

「こんなことになるとはな。だがそれもよいか」

エルヴィーラに顔を向けて呟く。

「そなたにそのままの想いを述べるのもな」

「最初からそうして下さればよかったですのに」

エルヴィーラは困ったような悲しいような、それでいて楽しいような笑みを浮かべて彼に言った。

「それなのに」

「今までのことは済まん」

もう意地悪は出来ない。今誓ったからだ。

「だからその分な。今まで以上に」

「だといいですけれど」

「仲良くやろうぞ。本当の夫婦らしく」

「はい」

エルヴィーラの方は意地悪をしようという気なぞ何処にもなかった。だから快く頷く。二人がようやく素直になれたところでムスタファはあることに気付いた。

「そういえば」

「どうしたのですか？」

「イザベツラ達がおらんではないか」

「彼等ならもう帰りましたよ」

「帰った！？どういうことじゃ！？」

「ですから祖国へ」

ズルマが言う。

「帰りましたけれど」

「何っ、わしは認めてはおらんぞ」

「それは私が」

エルヴィーラが述べてきた。

「そなたがか」

「はい。この度の御礼に」

「そうだったのか」

「よいではありませんか？御礼としては安いものかと」

「ううむ」

ズルマの言葉には難しい顔になる。ここでハーリーも言った。

「それに御后様とようやくこうして素直になれたのです。輝かしい祝いの施しとして」

「そうじゃな、そこまで言うのならよいか」

ムスタファ派ハーリーの言葉も聞いて朗らかに頷いた。

「留める者は貧しい者に施しをする。コーランにもある」

「はい」

「教えが違おうとも神が違おうとも寛容であれとも言っしな」

「左様です。ですから彼等にも」

「この度は恩恵を」

「うむ、ならばそうしよう。しかしじゃ」

ムスタファはここで気付いた。

「何か？」

「彼女等はまだ港にも着いてはおらんだろっ」

「そうですね」

ズルマがそれに応えた。

「丁度宮殿を出たところかと」

「そうか。ならば出るぞ」

「宮殿をですか？」

「それでは間に合わん。ここはバルコニーじゃ」

そこから宮殿の門が見えるのである。出迎えには丁度いい場所であつた。

「バルコニーですか」

「そうじゃ、そこから挨拶をしたいのじゃが。どうじゃ？」

「それはよいことです」

エルヴィーラがにこりと笑ってそれに賛成した。

「それでは今から」

「うむ」

ムスタファ達は従者達まで連れて総出でバルコニーに出た。丁度門からイザベツラ達が港に向かうところであった。

「そのイタリア人達」

ムスタファが彼等に声をかける。

「今回は感謝しておるぞ。その謝礼じゃ。行くがいい」

「それでいいんですね!？」

イザベツラが彼に問う。

「もうイタリアに帰りますよ」

「どのみち帰るつもりであろう」

「まあそうだけれど」

「うむ」

リンドーロとタツデオがそれに頷く。

「じゃがこそこそと逃げるよりは堂々と帰る方がいい。だからじゃ」

「おお、太っ腹」

「流石は」

「これがイスラムじゃ」

彼は大きな腹を揺らしてさらに大きな声で豪語した。

「異教徒であつても寛大に。アツラーは仰った」

「何かイスラムって凄いな」

「ああ」

「俺達も負けていられないぞ」

イザベツラ達と共に出て行くイタリア人達もその度量に打たれた。

「さあイタリアで楽しくやるがいい。じゃがわしもまたそちらに行くぞ」

「パツパタチですか？」

「ぞうじゃ、パツパタチの為に」

リンドーロに答える。

「また大いに飲んで食おうぞ」

「そして意中の人に素直になつて」

「幸福になるのじゃ。よいな」

「はい」

「では私もそれに」

ハーリーがムスタファの前にやって来た。

「うむ、よいぞ」

「では私も」

「私も」

ムスタファがハーリーを許すと従者達も。遂にはエルヴィーラやズルマまで加わつてしまつた。

「皆でパツパタチを祝おうぞ！」

「ムスタファ様万歳！」

「パツパタチ万歳！」

「僕等も僕等で」

イスラム教徒達に負けじとイタリア人達も。リンドーロがイザベツラに顔を向けてきた。

「ええ、イタリア万歳！」

「イタリア万歳！」

「そして」

ここでタツデオが言う。

「パツパタチ万歳！」

「パツパタチ万歳！」

彼等もパツパタチを讃えはじめた。

「美酒に美食に歌に踊り！」

「そして永遠に好きな人と結ばれるパツパタチを讃えよ！」

イタリア人もトルコ人も一緒に宴と恋の結びを讃えた。別れと帰還の前の盛大な歓声であつた。

アルジェのイタリア女 完

2006・8・22

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4139f/>

---

アルジェのイタリア女

2011年4月28日00時35分発行